第1回演奏会： 9/15（土） VILNIUS （LITHUANIA）　　紀行文編

・いざヴィリニュスへ （9月14日）

最初の演奏会開催地であるリトアニアの首都ヴィリニュスへは、中継宿泊地ヘルシンキから空路約１時間。
乗客定員約７０人のこじんまりとしたNorra航空ターボプロップ双発機によるローカル線での移動であった。
ヴィリニュス空港到着早々、何と２２個のスーツケースが届いていないという、いきなりのトラブルに遭遇。
ヘルシンキ空港で荷積みされなかったことが判明したものの、後の便で送られてくるとの説明に従うしかなく、
ホテル直配を手配したうえで、バスで当地の有名観光地トラカイ城へ向かうこととなった。

＜昼食を兼ねたトラカイ城観光は、本稿テーマ外のため省略＞

トラカイ城見学のあとヴィリニュス市内へバス移動。市街域に近づくにつれスピードが下がり、しまいには歩行速度なみに。いつもはここまで酷くはないのですがと現地ガイドさんが申し訳なさそうに弁明していた。
（翌週バチカン法王の訪問予定があり、歓迎準備に伴う交通規制が生じていた由）

１７時ようやくホテルに辿り着くも時間は押せ押せ。空港で受け取れなかったスーツケースが全員分無事届いていることを確認するや、直ちにホテル近所の練習スタジオ（現地ツァーコンダクターの岸田さんが手配）に徒歩移動。時限の１８時まで約４０分を残したところで前日リハーサルに入ることができた。

・前日リハーサル

前日（13日）は早朝から飛行機移動とヘルシンキ市内観光で時差込み３０時間の１日、この日（14日）も朝から飛行機、バス、トラカイ城観光、バスと移動づくめのスケジュールをこなした後に行う前日リハ。皆年齢相応にお疲れのところ、直近臨時練習日からは６日ぶりの声出しであった。
時間がないため、恒例のストレッチも発声練習もそこそこに演奏曲を順に歌い進めていくも、落ち着かない、声が出ない、合わない、揃わないのナイナイづくし。翌日（15日）の本番への不安を残した前日リハであった。

・いよいよ演奏会　（９月１５日）

皆の疲労を慮ってホテル出発を３０分遅らせ、徒歩２０分程度の近距離にある演奏会場ヴィリニュス工芸博物館へ。まずは、会場の下見から。

演奏会場は建物の一角の催し物スペースで、当初案内された写真にあった「明るそうな」会場とは違って、アーチ天井を支える太い柱とレンガ壁、窓から差し込む明かりも弱々しい、なるほど「旧武器庫」を想起させる「薄暗い」会場であった。（外は小雨混りの曇り、会場照明も未点灯でありました）

旧市街観光エリアの一角に位置しながら、土曜日であるのに館を訪れる人影はまばら。「工芸博物館」の名前からして地味で、その一角で行われる無料のコンサート。ざっと数えて椅子は約１００脚、よほど共演団体が有力でない限り、出演者の家族含めてもまあ全部は埋まらないだろうなあというのが率直な感想であった。

薄暗い会場下見

午後のリハーサル開始時刻までの間、会場近辺の観光スポットを現地ガイドさんの案内で徒歩観光。リトアニア大聖堂やリトアニア大公宮、聖アンナ教会など歴史地区は見所いっぱいだったが、持ち時間は３時間足らず。いかにも惜しいが仕方ない、レストランで昼食をとりゲディミナス城を回り込むようにして再び会場へ。

＜昼食を挟んでのヴィリニュス歴史地区観光記録は、本稿テーマ外のため省略＞

・会場リハーサル

前日リハ同様、演奏曲１回ずつの最終調整の機会、亀井指揮者の明るい開き直りに皆共鳴してか昨日の不安を掻き消す出来、誰もがこれならいけるという手応えを感じたようであった。
共演団体「ヴァルパス」との合同曲初の合同練習。先方提示曲「チュート」は今回の合同曲の中で、一番ついていきやすい歌詞の曲とはいえ初めての先方指揮、練習してきた以上に緩急・強弱のメリハリをつける演奏を求め

られることが分かった。当方提案曲「遥かな友に」では、彼ら予想以上に日本語の歌詞がついていることにびっくり。大柄な体躯に似合わず真面目で繊細な合唱団である印象を受けた。

さて、いよいよ最初の演奏会の開始時刻、ステージ衣装に着替え、改めて会場に臨んで驚いた。座席はほぼ埋まり、まだ途切れない入場者のために椅子を追加しているではないか。私たちに同伴のご家族の中には来場客に席を譲り最後列に退かれたり或いは立っての観覧となる方が出るほどの盛況であった。
動員力は「ヴァルパス」か、岸田さんか、それともリトアニアの人々って本当に合唱に関心が高いのか・・・・

いつの間にか満席に

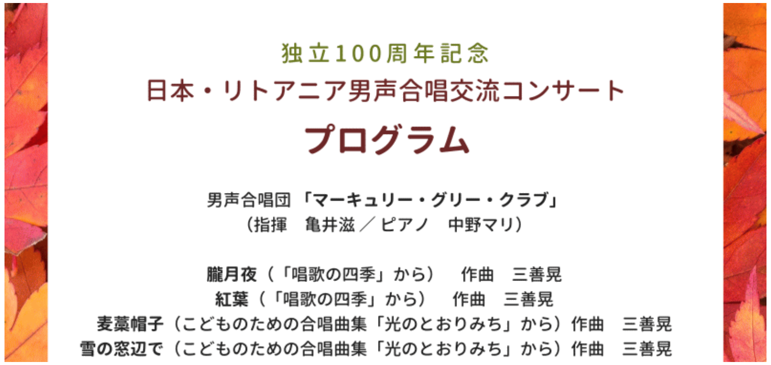
・本番ステージ

第１回演奏会は、私たちＭＧＣがホスト団体として第一、第三ステージを、間の第二ステージを共演団体「ヴァルパス」が、最後に一緒に合同演奏という構成であった。

会場では、現地コーディネータの岸田さんが用意してくださったリトアニア語と日本語の１枚表裏のプログラムが配布されていた。岸田さんは共演団体引き合わせの場では通訳を、演奏会では司会進行までこなされる獅子奮迅の活躍で、私たちが演奏に集中できるようにこの日１日（翌日のカナウスでの第２回目演奏会も）を仕切ってくださった。多才かつ切れ味鋭い仕事ぶりに感嘆。

第一ステージはＭＧＣの「日本現代作曲家の歌」
直前に行った会場リハーサルに続き、昨日と打って変わっての出来栄えを実感できた。いつもより少人数となった合唱規模に会場の響きがよく合っていたことに加え、何よりも観客の反応がとてもよかったのが大きい。特にステージ最終曲「髪」は西村メロディの美しい盛り上がりに皆が魅入られたのではないだろうか。大きな喝采を受けた。

会場で配布されたプログラム（日本語面）



独立100周年記念
日本・リトアニア男声合唱交流コンサート
プログラム

男声合唱団「マーキュリー・グリー・クラブ」
（指揮　亀井滋／ピアノ　中野マリ）

朧月夜（「唱歌の四季」から）　作曲　三善晃
紅葉（「唱歌の四季」から）　作曲　三善晃
麦藁帽子（こどものための合唱曲集「光のとおりみち」から）作曲　三善晃
雪の窓辺で（こどものための合唱曲集「光のとおりみち」から）作曲　三善晃

第二ステージは「ヴァルパス」のステージ。この日の登壇者は２０名そこそこで、ほぼ私たちＭＧＣと同じくらいの合唱規模であった。
リトアニアの作曲家の作品や民謡から比較的小さな曲を７曲。恐らくあまり耳にしたことのない曲だったと思われるが、残念ながら第三ステージの衣装（法被）準備のため、いったん控室に引上げて、会場に戻ってきたのだが満席のため会場脇や後方から立ったまま数曲をのぞき込むことしかできなかった。

第三ステージは再びＭＧＣの「日本民謡」
実はどの曲にも不安な箇所はあったのだが、幸いなことにほぼ取りこぼしはなく無難にクリアできた。
派手な衣装（法被）を着た異国のじいさんたちが歌う、アカペラの「日本の民謡」、もし途中で演奏が乱れても、現地の観客にはどうせ「フーン、こんな曲なのか」としか映らないだろうと開き直れたのが功を奏したか。

髪（「秘密の花」から） 作曲　西村朗
●**

リトアニア美術館男声合唱団**「ヴァルパス」**
(指揮　カルツァス・ユリユス ／ ピアノ　ペチュコニーテ・ヴィルマ）

丘の上で柳が揺れていた（リトアニア民謡）編曲ユワザス・ナウヤリス
バルト海の岸辺で 作曲 A. ロウドニキス 作詞 J. ストリエクーナス
風の時間　作曲 R. ポール 作詞 J. ピーター 訳詞 A. ギルジヤウスカス
白樺の冠（リトアニア民謡） 編曲 A. チプリス
リトアニア ー 歌の国　作曲 J. ツェハノヴィチュス　作詞 St. ジュリビナス
ただタンゴだけを　作曲 A. ロウドニキス
作詞 Br. マツケヴィチュス、V. ブロジェ、L. ペトケヴィチエネ
ラ・パロマ　作曲 S. イラディエル 編曲 Ed. バルシス
男声合唱曲編曲 R. カティナス
****

男声合唱団**「マーキュリー・グリー・クラブ」**
(指揮　亀井滋）

田植唄（秋田県民謡）編曲　間宮芳生
米搗唄（岩手県民謡）編曲　間宮芳生
南部牛追歌（岩手県民謡） 編曲　肥後一郎
居処　作曲　間宮芳生
****

フィナーレ

遥かな友に　作曲・作詞　磯部俶
チュート（リトアニア民謡）編曲 J. T. ケルプシャ

「居処（いど）」は鈴や足踏みに掛け声が加わり、さぞかしエキゾチックでクレイジーな曲に聞こえたのではないだろうか。曲が「オンヨ、オンヨ」と消え入ると、暫しスタンディングオーベーションに包まれた。

時間が押され気味だったので、用意していたアンコール曲「Ave Maria」はパスして合同演奏へ。

最後は合同曲
まずは「ヴァルパス」のカルツァス指揮者が「チュート」を振り、ついで亀井指揮者が「遥かな友に」を指揮。
さすがに人数が倍になると迫力が違う。リトアニア民謡「チュート」では思い切り緩急をつけた演奏、逆に「遥かな友に」は思い切りPPで終う静けさで観客にその対照を印象付け、余韻を残しながらめでたく終演。
出来栄えへの満足感と、いつまでも鳴りやまない拍手に感動。

・交歓会

終演後、会場後方スペースで共演団体との交歓会。総合司会は泉原さん、通訳はもちろんコーディネータ岸田さん。角田さんご夫妻手作りの「折り紙（鶴）」をお土産に贈呈すると、ヴァルパスからも今回の記念にと大きな、ズシリとした「素焼き（？）の鈴」の贈りもの。橋本団長、お持ち帰りご苦労様でした。

岩谷さんのご縁で在リトアニア日本大使館から出席いただいた山崎大使の「ヴァルパスさん、ぜひ来日してください」の一言に全員が沸き立つ場面も。男声つながりの親しみもあって至る所で言葉の壁を越えた会話が盛り上がった。最後は交互に大声で持ち歌を披露しあい、別れを惜しみつつの散会となった。

確かに体つきや声量、髭面では圧倒されたヴァルパスの面々だが、自分でも意外なほど威圧されるということはなかった。メンバー個々は多分私たちの方が年上、ちょっと自信がなさそうな人や、妙に張り切って大声の人など、根は私たちと同じ合唱好きの熟年オジサンじゃないか。垣根を感じさせない気さくな男声合唱仲間との楽しく嬉しいひと時であった。